待兼山俳句会

第七百四回

世話人　山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子
東中　乱・向井邦夫・森　茉衣

令和七年九月二十二日（月）　会場　大阪倶楽部　会議室　締切　午後二時

出席者　瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡　翠・東中　乱
向井邦夫・森　茉衣・山田安廣

投句者　碓井遊子・西條かな子・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子・東野太美子・平井瑛三
以上出席者十一名＋投句者八名　計十九名

兼　題　蟋蟀・コスモス（幹三）　秋茄子・秋簾（暁子）　当季雑詠　通じて八句

次　回　例会　令和七年十月二十日（第三月曜日）会場　大阪倶楽部会議室　締切　午後二時
兼題　菌（きのこ）・秋高し（幹三）　林檎・草紅葉（暁子）　その他当季雑詠

次々回　令和七年十一月十七日（第三月曜日）

選者吟

こほろぎの闇の色して闇に棲む　幹三
コスモスに電車の重さ通り過ぐ
世の風を漉して入れけり秋簾

病む人に蟋蟀昼も鳴きにけり　暁子
未練ある思ひの如く秋簾
日のぬくみ残る秋茄子料理せむ

幹三　選

秋茄子の味に二人の見交はせり　邦夫
ひとり解くパズルこほろぎ鳴く夜半　輝子
音もなく目前の葉に赤とんぼ　茉衣
◎独り居や動くことなき秋簾　翠
蟋蟀や昼静かなる漁師町　暁子
◎日のぬくみ残る秋茄子料理せむ　暁子
門の錠下ろし聴入る蟋蟀や　茉衣
五右衛門風呂は父の手造りちちろ鳴く　かな子
◎気兼ねする人なき暮し秋茄子　太美子
秋茄子葉も紺色に染まりけり　堯子
秋簾掛かるこの家も吾も旧りぬ　眞知子
夕ちちろ見知らぬ人と会釈する　乱
我が庭にこおろぎ居場所を見つけ居り　朱美
風柔く変へしや軒の秋簾　兵十郎
蟋蟀や少し酔ひたる頬に風　暁子
◎家毎にコスモス揺るる村を抜け　太美子
巻き上げて時には垂らす秋簾　邦夫
◎コスモスと同じ背丈の女の児　茉衣
秋桜の夕陽のみこむまでの原　盛雄
両側のコスモス見遣る二人かな　邦夫
コスモスの奥の奥より人の声　安廣
コスモス街道遥かに望む御嶽山　翠
◎病む人に蟋蟀昼も鳴きにけり　暁子
焼くだけと言へどされどの秋茄子　恵子
秋茄子を採ればずつしり丸き尻　安廣
静けき夜月の斜めに書斎へと　邦夫
秋簾奥にあまたの声すなり　暁子
◎辻褄の合はぬ家計簿ちちろ鳴く　輝子
秋簾たより途絶えしままの友　かな子
手に包む蟋蟀の足こそばゆき　安廣
コスモスに風生まれけり山の寺　瑛三

幹三　特選句講評

・独り居や動くことなき秋簾　翠
夏を惜しみ懐かしむ心、秋の侘しさが「動かない」という措辞に現されています。部屋の中からの視点と同時に外からの視点も感じます。

・日のぬくみ残る秋茄子料理せむ　　暁子
　さっきまで畑に成っていたものを拵いだばかりという新鮮さがつたわってきます。秋茄子の美味しさに期待する、厨でのわくわくした気持ちです。

・気兼ねする人なき暮し秋茄子　　太美子
　お気楽な一方、実は少しばかりの淋しさも感じます。そんなこともあいまって、夏のものと比べて小ぶりで色の濃い茄子との取り合わせが上手く決まりました。

・家毎にコスモス揺るる村を抜け　　太美子
　村の風景、暮しの様子がよく見えます。しなやかに揺れる色も印象的。そんな村の家々を「抜け」て行くという動きが効果を出しています。

・コスモスと同じ背丈の女の児　　茉衣
　コスモス畑で出会った女の子、そこで背丈に気がつくところが俳人なんですね。この発見を述べるだけで、コスモスの色や女の子の年齢や様子が全て見えてきます。俳句はこう来なくっちゃ、という一句。

・病む人に蟋蟀昼も鳴きにけり　　暁子
　病むと動けない分、感覚が研ぎ澄まされてきます。昼の虫の声もひりひりと沁みるように聞こえるのではないか、と。

・辻褄の合はぬ家計簿ちちろ鳴く　　輝子
　下五での空間的な展開が俳句らしいですね。手を止めてふと思案した時に聞こえたこおろぎ、深々と更けてゆく秋の夜が感じられます。

暁子　選

万本のコスモス歌ふ風の歌　　安廣
独り居や動くことなき秋簾　　翠
◎駄菓子屋に子の姿なく秋簾　　堯子
◎人工島喧噪よそに虫集く　　堯子
コスモス園好きなだけ摘む最終日　　輝子
五右衛門風呂は父の手造りちちろ鳴く　　かな子
異常なる熱気に耐へし秋簾　　兵十郎
コスモスと同じ背丈の女の児　　茉衣
秋茄子葉も紺色に染まりけり　　堯子
秋茄子はお任せあれと嫁の笑み　　朱美
◎直遠火てふ指示付けて秋茄子　　兵十郎
巻き上げて時には垂らす秋簾　　邦夫

◎西に向く昭和の厨秋簾　和江

秋簾外すと言ひてまた一年　輝子

ひたすらに苦行のやうにちちろ鳴く　輝子

◎奈良坂はコスモス浄土風浄土　輝子

コスモスの隙に太平洋のあり　幹三

コスモスに電車の重さ通り過ぐ　幹三

辻褄の合はぬ家計簿ちちろ鳴く　輝子

・人工島喧噪よそに虫集く　堯子

・一読して万博会場だと思った。作者は灯りと喧噪の届かぬ会場の外のどこかで蟋蟀の鳴いているのに気づかれたのだろう。秋の虫の季語には趣のある場所を合わせたり、人が何かしている場面を取り合わせることが多い。この句は少し感じが違っているのと、今年ならではの句かと思い選んだ。

・直遠火てふ指示付けて秋茄子　兵十郎

夏の強い日差を浴びて皮が厚く実の詰まった夏茄子に対し、秋茄子は小粒で皮が薄く、水分が多くて甘味がある。これを差し上げる場合、少しでも美味しく味わってもらいたいので、料理法の指示もするのだ。

・西に向く昭和の厨秋簾　和江

西向きの台所は夕方まで明るく、冬は暖かいというメリットがあるが、夏は西日が当たり食物が腐りやすいので、どちらかといえば西向きは台所には適さないのではないか。しかし昭和の台所はまだ不遇であった。現代のように堂々とよい場所を主張出来るような立場ではなかった。そこで夏は簾が吊るされ、秋になってもなお強い西日から食べ物

暁子　特選句講評

・駄菓子屋に子の姿なく秋簾　堯子

今日の句会で一番好きだった句です。駄菓子屋は店の戸を開けたままにしてあり、簾を吊ってあるのだろう。秋になってもまだ日差しが強いので、商品を守るためにも簾をはずせない。かつてはこの簾をくぐって、絶えず子供たちが出入りしていたのであろう。少子化や大型店化の現代、寂れた店にうらぶれた秋簾が昔のままにかけられている。

を守るため簾が必要なのだ。

・奈良坂はコスモス浄土風浄土　　輝子

奈良坂は知らなかったので調べると、奈良市と京都府の境界に位置する奈良山を越える坂道で、奈良と京都を結ぶ主要な交通路だったらしい。おそらく今は昔の様に賑やかではなく、静かな街道で心地良い風にコスモスが揺れているのであろう。奈良という地名と浄土が合っており、中七下五のリフレインが爽やかな秋の感じを出している句だと理解した。所が句会の後で作者にお尋ねしたところ、この句は奈良の般若寺の句で、コスモス寺として有名なこの寺にある会津八一の歌碑「ならさかのいしのほとけのおとかひにこさめなかるるはるはきにけり」に因んで詠まれた句とのことであった。

互選三句

朱美選

ひとり解く。パズルこほろぎ鳴く夜半　　輝子
辻褄の合はぬ家計簿ちちろ鳴く　　輝子
コスモスや土手駆ける夢松葉杖　　恵子

明日は我が身、気持ちが痛いほどわかるような気がします。

平井瑛三

気兼ねする人なき暮し秋茄子　　太美子
コスモスの奥の奥より人の声　　安廣
西に向く昭和の厨秋簾　　和江

残念ながら今月特選句見当りません。

和江選

日のぬくみ残る秋茄子料理せむ　　暁子
手に包む蟋蟀の足こそばゆき　　安廣
コスモスに電車の重さ通り過ぐ　　幹三

電車通過の度にゆれるコスモスの景。

かな子選

辻褄の合はぬ家計簿ちちろ鳴く　　輝子
コスモスと同じ背丈の女の児　　茉衣
一人居の遅き昼餉や秋簾　　幹三

一人居を達観した人の静かな境地、そしてどこかに哀愁。

邦夫選

駄菓子屋に子の姿なく秋簾　　堯子
気兼ねする人なき暮し秋茄子　　太美子
ひたすらに苦行のやうにちちろ鳴く　　輝子

蟋蟀は暗い時間帯に「ひたすら苦行のように」鳴く。

恵子選

未練ある思ひのごとく秋簾　暁子
雨戸繰りあたら蟋蟀死なせたり　乱
恋初めし人とコスモス写真帳　安廣

ほんわりする句に優しい作者のお姿が浮かびました。

堯子選

辻褄のあはぬ家計簿ちろろ鳴く　輝子
コスモスは二歳で逝った妹の花　かな子
世の風を漉して入れけり秋簾　幹三

秋簾は色褪せ侘しいが、この句では爽やかさが残る。

輝子選

気兼ねする人なき暮し秋茄子　太美子
蟋蟀とつながる闇に眠りをり　幹三
病む人に蟋蟀昼も鳴きにけり　暁子

先師、直入先生に贈る追悼のお句かと。誠に懐かしい。

兵十郎選

病む人に蟋蟀昼も鳴きにけり　暁子
西に向く昭和の厨秋簾　和江
夜の風を漉して入れけり秋簾　幹三

秋簾には世間の風を漉すと言う役目があると言う作者。

茉衣選

一人居の遅き昼餉や秋簾　幹三
気兼ねする人なき暮し秋茄子　太美子
秋簾揺れて訃報の便り来て　盛雄

侘しい秋簾を揺らして故人が別れを告げに来たのでは。

眞知子

蟋蟀や昼静かなる漁師町　暁子
一人居の遅き昼餉や秋簾　幹三
コスモスと同じ背丈の女の児　茉衣

一面のコスモスに埋もれた女の児もコスモス。

翠選

気兼ねする人なき暮し秋茄子　太美子
秋簾揺れて訃報の便り来て　盛雄
コスモスの頷き車椅子通す　暁子

身障者に対する優しい環境をコスモスを通して。

盛雄選

蟋蟀や踏み出す一歩にピタと止む　堯子
秋簾巻き上げ容れる西日かな　堯子
コスモスに風生まれけり山の寺　瑛三

山寺のコスモスの原に突如風が生じて揺れる花が美しい。

安廣選

秋簾たより途絶えしままの友　かな子
コスモスに風生まれけり山の寺　瑛三
辻褄の合はぬ家計簿ちちろ鳴く　輝子
辻褄が合わないイライラを慰める如く鳴く蟋蟀。

遊子選

秋簾たより途絶えしままの友　かな子
奈良坂はコスモス浄土風浄土　輝子
五右衛門風呂は父の手作りちちろ鳴く　かな子
我が家も同じ事情・風情の頃が懐かしい次第。

乱選

未練ある思ひのごとく秋簾　暁子
コスモスの海に分け入る吾もわらべ　輝子
秋桜の夕陽のみこむまでの原　盛雄
景色が見える。句柄が大きい。天と地の融合を詠った。

参加者自選句

一面のコスモス荒れ地に晴れ着きせ　朱美
コスモスやチョゴリの人の風に溶け　瑛三
西に向く昭和の厨秋簾　和江
五右衛門風呂は父の手造りちちろ鳴く　かな子
縁側に色寂び揺るる秋簾　邦夫
コスモスや土手駆ける夢松葉杖　恵子
駄菓子屋に子の姿なく秋簾　堯子
郷愁のちちろ鳴く土間太き梁　太美子
辻褄の合はぬ家計簿ちちろ鳴く　輝子
ベランダか地の底よりかちちろ虫　兵十郎
フロリダの浜に連立つ孫と月　茉衣
わが庭のどこかでちちろ早も鳴く　眞知子
独り居や動くことなき秋簾　翠
蟋蟀に聖母子像も耳すます　盛雄
コスモスの奥の奥より人の声　安廣
仙崎やみすずの里の海胆ご飯　遊子
コスモスの精になりしか君いづこ　乱

ひとこと

山田安廣

暑い暑いと言って過ごして来ましたが、漸く秋の訪れを実感できる今日この頃です。皆様方も、きっとホッとして普通の日常を取り戻して居られる事と存じます。

さて、今回は句会の後大きな会報編集方法の変更を提案させて頂きました。即ち、今までのGoogleフォームを用いた方法では編集係の皆さんの負担の軽減に限界があります上に、投稿される皆様方にも5句投句するのに、5回も同じ作業を繰り返すなど、何かと面倒な事が多かったと思います。

新しい方法は待兼山俳句会の為に専用の編集ソフトを開発するもので、操作自体はGoogleフォームの場合とよく似たものですが投稿される方にも編集係の方たちにも、多くのメリットがあります。詳しくは、別便にてご説明申し上げますので近くお送り致しますメールをご覧下さいますようお願い申し上げます（12月例会から試験導入を予定しております）。

★

誤記の訂正（前号七百三回会報八月号）

二頁上段幹三選の六句目安廣さんの句：
（文月や星それぞれにもの言うて）の「言うて」に傍線を引く。

八頁下段「ひとこと」の後ろから三行目の「句会」を「句」に修正する。